



THE KAHALA

HOTEL & RESORT
YOKOHAMA

第1回

誕生、「ザ・カハラ・ホテル&リゾート 横浜」。 その原点をハワイを訪ねて

2020年6月、横浜を舞台に「ザ・カハラ」が第二のスタートを切ります。
世界屈指を誇るホスピタリティの原点をブランド生誕の地、ハワイからお届けします。

ハワイと横浜には、ハワイと日本のつながりの原点となった縁がある。それを紐解くキーワードが「元年者（がねんもの）」だ。元年者とは、文字通り、明治元年にハワイに渡った最初の移民のことを呼ぶ。151年経った今もハワイの政治や経済に大きな影響を与える日系移民の歴史は、まさにここから始まった。その彼らが新天地であるハワイをめざして最初に出帆した港が、横浜だったのだ。

しかも、単にそこから旅立っただけではない。元年者は、江戸（東京）および横浜で集められた人々からなっていた。例えば、リーダーに選ばれた牧野富三郎は、横浜で外国人向けの遊郭として繁盛していた「神風楼」の番頭だった。後のハワイ移民が、農村出身者が多かったのに対し、元年者は、開港地横浜の都市生活者が中心だったのだ。明治元年、すなわち西暦1868年といえば、アメリカ併合の前、ハワイ王国の時代になる。移民の募集を任されたのは、その総領事に任命されたジョン・リードというオランダ系アメリカ人だった。そして1868年5月（旧暦の慶応4年4月）、サイオト号という帆船が、元年者を乗せて横浜からハワイに向けて出発した。明治に改元されるのは同年10月のこと。だが、出帆の直前に横浜は新政府軍の支配下となり、事実上の明治時代が始まっていた。サイオト号がホノルルに入港したのは、

横浜を出発して34日目の朝のことだった。夜が明けて、甲板に出た元年者たちは、眼前に広がる港に歓声を上げたと伝えられている。

ハワイと横浜のつながりは、これで終わった訳ではない。1881（明治14）年3月4日、日本の明治政府にとって初めての国賓、ハワイ王国のディビット・カラカウア王を迎えたのも、縁があることにまたしても横浜の埠頭だった。ワイキキのカ



上・左下／ハワイ「ザ・カハラ・ホテル&リゾート」。ゲストを迎え入れてくれる美しい内観とビーチの静けさは永遠の魅力だ。右下／大事に保管される元年者のネームリスト（Hawai'i State Archives提供）。

ラカウア大通りに名前を残す名君だ。
通信不便だった時代、入港予定日を過ぎても船が現れず、迎える人たちがやきもきしていたところ、4日早朝、一行を乗せた客船が横浜港に着岸した。港には祝砲が響き、ハワイ国歌「ハワイ・ポノイ」が厳かに演奏された。思いがけない大歓迎に、カラカウア王は直立不動のまま涙を流していたという。それは王が作詞した歌でもあったからだ。

同じ太平洋の小国だった日本との関係に、自らが治める王国の将来を託したいと考えていたカラカウア王。この来日を機に、日本からのハワイ移民は国主導の官約移民の時代に入る。

歴史を紐解くと、日本とハワイをつなぐ物語は、ことごとく横浜が舞台であったことに気づかされる。神戸がアジア経由ヨーロッパ航路の港だったのに対し、横浜は、サンフランシスコやシアトルなど北米航路の港だった。太平洋の彼方にアメリカがあり、その手前にハワイの島々があった。カラカウア王が上陸した大棧橋では、毎年、フラのイベントが行われる。王は白人支配で衰退したフラの復活に苦心した名君でもあった。横浜とハワイの絆はこうして今に継承されているのだ。

そう考えると、ハワイのホテルブランドが日本で開業するのに、横浜ほど必然性のある都市はないのかもしれない。時代を経て、2020年6月に産声をあげる「ザ・カハラ・ホテル&リゾート 横浜」。ここは、単に横浜にハワイを持ち込もうとしているのではない。ホテルの建つ土地の文化や自然を尊重することで、独自のホスピタリティを築き上げてきた「カハラ・スピリット」を遠く離れた横浜の地で実践したいと考えている。

ザ・カハラは、ハワイのホスピタリティ産業を代表するラグジュアリーブランドだが、ワイキキにあるクラシックホテルとは異なる立ち位置もある。まずはロケーション。有名観光地のワイキキではなく、ハワイ王朝の聖なる土地であった閑静な住宅地、カハラにあること。だからこそ、ゲストに

“横浜、そしてハワイ 歴史が証明する必然の出会い”

はプライベートで特別な休息、真のラグジュアリーステイが約束される。ハワイにおけるザ・カハラの圧倒的なブランド力は、ホテル名の由来ともなったこのカハラの地とつながっている。

そして1964年の創業であること。当時、建築やインテリアに落とし込まれたのは、表層的なハワイアン趣味ではなく時代の先端をゆくモダンなテイストであった。対するハワイらしさは、「アロハ」の言葉に象徴されるハワイアン・ホスピタリティ、そしてハワイの自然や文化を尊重する姿勢に示された。カハラのブランドが確立された60年代後半から70年代にかけてというのは、50年代前後に見られた悦楽的なハワイアンブームとは異なる、より本質的で内面的なハワイアンルネッサンスが勃興した時代でもあったからだろう。

そうした伝統は、今でもKISCA (The Kahala Initiative for Sustainability, Culture, and the Arts) の活動に表れている。文字通り、ハワイにおける



上／空と海に包まれるハワイの自然。「ザ・カハラ」が永遠に残すべき財産だ。左／ブランドが一丸となって取り組む「KISCA (次ページ参照)」の活動にもその姿勢が表れている。

文化や芸術、サステナビリティにおいて、カハラがイニシアティブをとっていく活動である。

代表的な実践例が「ザ・カハラ・リフォレストーション・イニシアティブ」だ。ハワイの固有種の樹木を植えて、ハワイ古来の森を復活させようというもの。非営利団体「ハワイ・レガシー・リフォレストーション・イニシアティブ」と連携し、一日あたり8ドルの料金を設定。ゲストから寄付を募り、60ドルごとにオアフ島、ノースショアにあるガンストック牧場の「ザ・カハラ・レガシー・フォレスト」にコアヤミロの木など、ハワイ固有種の木を植える。もちろん一人で60ドルを負担

し、自身の寄付した木を植えても構わない。固有種の森の再生は古代ハワイの風景を甦らせるだけではない。木製カヌーの制作やアートワークなど、ハワイ文化の再生にもつながっている。「ザ・カハラ・ホテル&リゾート 横浜」は、このKISCAの活動を横浜でも展開してゆく予定だ。横浜は歴史ある港町だが、ラグジュアリーステイを楽しむ旅先としては、発展途上の可能性を持っている。横浜にはまだ発見されていない、知られざる魅力がたくさんあるのだ。ザ・カハラが開業

した1964年当時のハワイがそうであったように。元年者は、後の官約移民のように花嫁を日本から呼び寄せることなく、地元の女性と結婚し、ハワイに根づいた人が多かった。明治150年の節目に当たる2018年、その一人である鈴木徳次郎さんの子孫がハワイの新聞社の呼びかけで集まった。総勢約220人、最も若い世代は8世代目となり、さまざまな人種の血が混じった子孫たちは、弁護士、医師、企業家からフラダンスの先生まで、ハワイの経済、文化を支える多様な仕事に就いていた。

**“世界一温かいホスピタリティを
海を越えて横浜の地に”**

「ザ・カハラ・ホテル&リゾート 横浜」は、ハワイにルーツを持つブランドとして、その誇りを忘れ

ずに、しかしハワイに固執することなく、横浜に根づき、横浜の魅力を再構築し、発信するホテルでありたいと願っている。元年者が、日本人の誇りを胸にハワイに同化していったように。ハワイと深い縁で結ばれた横浜で、2020年、新たなザ・カハラの物語が、始まる。

○山口由美(ノンフィクション作家) 神奈川県箱根町出身。海外旅行とホテルの業界誌紙のフリーランス記者を経て作家に。2012年「エーデン・スミス水俣に捧げた写真家の1100日」で小学館ノンフィクション大賞受賞。『アマン伝説』『日本旅館進化論』など著書多数。



左／2020年6月、横浜の「みなとみらい」エリアに誕生する「ザ・カハラ・ホテル&リゾート 横浜」。都会派の顔をした「ザ・カハラ」ブランドの第二の存在でありつつ、本国ハワイの「ザ・カハラ」のホスピタリティはそのままに。